

学界動向

南関東に於ける

土師器とその問題

坂詰秀一

一

土師器の編年的研究は、杉原莊介教授により、南関東地方を中心として行われ、前期の和泉式より中期の鬼高式を経て後期の眞岡式、国分式にいたる過程が明らかにされた。しかし、かゝる編年的研究の軸にぞつたこの研究も、各型式相互の概念的時差と二、三の性格の具体的認定とをのぞいては、まだ幾多の問題点を残さざるをえなかった。土師器の資料が漸次増加するにしたがつて必然的にそのフランクを充填せんとする動きがあらわれてきたことは、当然のことではあるが、慶賀すべき現象と云わなくてはならない。

最近に於ける土師器の研究動向は、大別して三

つの傾向を認めることが出来る。第一は、土師器研究にあたり、もつとも基礎的な問題である土師器の定義を規定せんとする動き、即ち、弥生式土器より土師器への変遷をどこに求めるかと云う問題に対する検討である。第二は、従来の研究成果である既成概念に立脚してその編年を線括的に整備し、あわせて新知見——それは主として所謂フレ和泉式土器の認定である——をつけ加え、系統的に論じているものであり、第三は、既成編年中の各型式自体の分析——主として時差の問題——と各型式相互間に於ける発展過程の具体的認定手段として介在型式の摘出充填によつて、その展周状態を把握せんとする動きである。

土師器研究のあり方とその問題点の解明については、また多くの論議が重ねられなくてはならないであろうが、本稿に於いては、筆者の管見にふれている南関東地方に於ける土師器研究の現成果を中心として、それの近況を紹介することを主眼とし、それについて瞥見することにしたと思う。

考古学の研究に於いては、土器の研究を才一義的のものとして取扱かうことは周知の通りであるが、これは勿論、文化の展開過程を明敏にその形態に反映しているからであつて、土器の編年的研究によつて文化推移の状態を把握することが、あるていどまで可能である理由に起因している。編年的研究によつて、相対的に前後に認識された各型式は、それ自体、相應の歴史的背景をもつて出現し、更に漸次展開されたものであつて、その展開過程の各型式相互間に於ける性格の相異は、外的・内的な必然的結果によつて促進されたものに外ならないであらう。したがつて、編年的研究の目的は、相対的前後関係の認識によつて設定された型式自体の文化現象の総合的把握とそれを生成しめたる要因、更に次階梯に進展すべき必然的条件についての究明にあらねはならないであらう。しかし、かゝる立場は、その取扱う文化の性格を

吟味検討する手続きを至ら後に適應しなくてはならないことは云うまでもないことであらう。

土師器の編年的研究は、まづ型式の認定とそれの相対的前後関係の認識とによつて開始されたが現在にあつては、それに立脚してより明確な線を打出さんとする傾向が看取される。和泉式→甕高式→真向式→四分式と一見整然と編年されている土師器も、その上限と下限の問題は勿論、各型式相互間に於ける推移過程の具體的認定資料が、完備されているとは云えず、その文化内容もさわめて漠然としたものであると云える。土師器は弥生式土器の系統の素焼土器であるとする常識的見解よりも、問題は弥生式土器が、何故、如何なる要因によつて所謂土師器に漸移したものであるか、その歴史的背景を把握することが先決である。この問題は、土師器の定義を規定する場合のものとも重要な点である。土師器の定義については、いくつかの見解も発表され、また問題もあるが、中央集権的機構があるていど確立された期

に於ける必然的帰結の一側面として、その影響をうけてある種の規格のもとに出現した一郡の生活容器等を指すとの見方もあるが、その初現形態は、勿論全国的に斉一性を持つものではありえず、一定の機構整備とその文化内容の伸張がより全国的に顕現されて来た時期に、はじめて統一のとれた器型のセツトと文様の消失とが普遍化したと見るべきであらう。しかし、この桌についても幾多の問題点を包括していると云える。

最近、かゝる問題に密接な関係を有すると思われる所謂フレ和泉式土器の様相が漸次解明される域に達しつつある。この型式は、明らかに弥生式後期の前野町式土器と土師器前期に編年されている和泉式土器との間のヒータスを充填するものとして注目に値するものであるが、その中間形態としての必把握されるのでは意味がなく、前野町式土器が如何なる要因に誘発されて所謂土師器なる形態を有する階梯に漸移していったものであるか、その歴史的背景を説明することこそ今後課題とされた重要な問題として留意すべきである。弥

生式土器の斉一性を有せぬ特質——土師器との相対性によつて——が顕著に認められるのは、前野町式土器ではなくして、その前階梯である弥生町式土器である。前野町式土器にあつては、ある種の規格とでも稱すべき性格が認められ、フレ和泉式土器を発生するその萌芽が既に見られるのであつて、一部の研究者が、前野町式土器をも土師器の系列中に加えたいとする予測を有することも当然のこととして理解されなくてはならないであらう。かゝる桌は、生活技術の問題とも関連してゐるのであつて、その背景に地域的文化の性格を認めることが必要である。一例をあけるならば、前野町式土器及び和泉式土器を出土する竪穴住居址に於ける爐の存在位置がともに中央を離れて壁面に近く位置する様になつてくるのもこの場合注意されるべき現象と云わなくてはならない。

三

和泉式→鬼高式→眞向式→国分式との編年が確立されたのは、昭和一〇年代の中葉以後で

あり、その系列中に於ける和泉式及び志高式についての内容は、いち早く公表され一般に知られるにいたつた。しかし、真向式及び回分式については、つい最近まで系統的に論ぜられた論文を著す、きわめて漠然としたものであったが、それらについて、漸く明らかにされる様になつて来た。

次に関東地方に於ける各型式について、既述稿^(註)の軸にそつて簡単に述べることになしよう。

矛工様式　こゝで矛工様式と稱する土師器は、和泉式以前、前野町式以後の所謂スレ鈕泉式土器（古式土師器）に該当する。この様式の土師器は、最近、埼玉県東松山市五領遺跡より多量に出土したので、一部の研究者は五領式土器と稱している。器形には、甕・壺・器台・台付甕等が知られており、器壁面は、篋状工具をもちて整形研磨され、又、一部に一種の文様が施されるのが一の特徴である。甕形土器は、その器形が大きく、口縁部外側に縁を有するものと、縁の存在位置と略同一個所にそれに代る浅い段落をつけているものとがある。縁の存在個所は口唇部と頸部上方とにあり、

胴部は球形に張つてその最大径は器高の中位にある。底部は七志を特徴とする。壺形土器は二つの種類がある。一は口縁部外反し、その外側に縁がつけられ、頸部は極端に細く、頸部垂直の例多^くして、胴部は器高の中位より稍下位に最大径を有する横円球形を呈し、七志である。而して、この種のものには多くハケ又は櫛目による文様が見られる。二は小形の七志土器であつて口縁部は大きく外反するものと直立するものとがあり、いずれも胴部最大径及び器高より大なるものである。又、底部は、普通の七志と七志ではなくして小さな凹底になつてゐるものがある。器台形土器も、壺形土器同様二種類あり、それによつて両者の密着なる關係を變うことが出来る。一は壺形土器の一と組合さるべきもので、口縁するべく外反し、縁をもち側面八字形にひめく台を二つその基部をあい接して、凹形を呈しているものであり、二は壺形土器二と組合さるべき性質を具有する台にして浅盤に八字形の脚をつけてゐるもので、この脚部に三孔が穿かれてゐることは特に注意すべきこ

とである。脚に窓を空けているのは前野町式土器との密接な関係を示しているものであつてその事実は台付甕形土器の存在によつても知られる。

才Ⅱ様式 東京都北見摩郡伯江町和泉遺跡出土資料を標式とする和泉式土器を本様式とした。


器形は、甕・壺・甑・鉢・杯・高杯が知られ、器壁面には八ヶの整形痕等が見られるものもある。

甕形土器は、口縁部外反し胴部は球形にしてその最大径は中位にある大形のを主とする。又、

口縁部と胴部との境には一条の稜が見られ、底部は小さな平底である。壺形土器は、才Ⅰ様式同様

二種類認められる。一は短い口縁部が直立し、

胴部球形を呈する平底のものであり、二は口縁部外反し、胴部楕円球形のもので、底部は平底に近い丸底のものである。而してともに小形である。

甑は、鉢形のもので底部中央に一孔を施成前に穿っているものであり、その特徴は複合口縁にあると云える。鉢形土器は、小形のものであり口縁部稍外反し口唇部より平底の底部にかけて凹八状に線を持っている。杯形土器は、状を呈するもの

が一般的であつて底部近くに一種の稜が見られ、高杯形土器は、杯部と脚部とを別個に作成したもので底部は爰くの場合平底である。更に杯部の口縁部と胴部とをも別に作られている。したがつて口縁部と芯部との境には稜が見られるが、これを特徴と稱してもよい。脚部は、裾で急激に広がるもの、中には杯部の底部近くにはめ込込式の滑の狀態が明確に認められるものもある。

才Ⅱ様式 本様式は中期に編年されている鬼高式土器をあてる。千葉県市川市鬼高所在遺跡を標式としているもので、その使用期間が比較的長期にわたつたらしく、器形の種類、甕・壺・甑・鉢・碗・盃・杯・高杯にもそれぞれ形態的相異が認められるが、こゝでは概念的にその二、三の特徴を列記するに止める。甕形土器には二つの種類が存在する。才Ⅱ様式の球形甕形土器がこの時期に至つて用途によつて分化されたわけである。その理由は堅穴住居址例より窺て炉よりカマドに変化したことが知られ、それにともなつて現われた必然的現象として理解される。即ち、カマドに加

けて使用する必然的要求より球胴部が長胴部に愛
化し、口縁部径と胴部最大径とが略同一になる意
沸に便なる所謂長胴形の甕形土器が作成されたの
である。一方、器高はさして高くなり、胴部最大径
が口縁部径より大きく張っている平底の甕形土器
が出現するが、これは貯蔵用と考えられており、
生活状態がより複雑かつ合理的になったことが推
察される。甕形土器は、才Ⅱ様式と同様に二類が
認められる。一は口縁部外反し、くの字型を呈す
る頸部より球状を呈し、つゞきの胴部最大径を中位
又は若干上位におくもので、底部は平底の小形土
器である。二は口縁部小さく稍外反する傾向があ
り、胴部球形にふくれて丸底の底部に移行する小形
のものである。甕形土器は、才Ⅱ様式に比較して
器高は背高になり、外反する口縁部は一度頸部に
て直立し、胴部は又ムースに下方に向つてすま
つていくもので、口縁部径と胴部最大径とは略同
値を有する。而して底部の孔は、才Ⅱ様式のもの
と比較するに大きく穿っているものと底部全体を
くり抜いているものとがある。甕形土器は、大別

すれば二種類あるが実際にはかなりのバリエー
に富んでいる。器高は大なるものと小なるものと
が認められ、口縁部も外反するもの、直立するも
のが存在し、頸部に一種の稜を形成しているもの
もある。底部は平底と丸底のものとが知られてい
る。甕形土器は、才Ⅱ様式のものが発展したもの
であり、形態は略同様である。坏形土器は、大別
すると二種類あり、一は口縁部直立し、胴部との境
は稜を認められる平底土器で、二は口縁部が若干
内向するものと直立する例とがあり以下丸底又は
平底の底部にゆるやかに至っているものである。
しかし実際には一の場合のごとき口縁部が直立す
るものの例でなく、外反又は内向せるものも認め
られ一様ではない。高坏形土器にも二種類あると
云われている。一は坏形土器と同様なる坏部に低
い末左けりの八字型脚をつけているもので、二は
坏形土器二に比較的背高の脚をつけているもので
ある。而して才Ⅱ様式に鉢及び坏形土器が少量に
見出されることは円柱状土製品（煮沸の際に使用
される柱状台）の存在須恵器の伴出とともに留意さ

れなくてはならない。質、色調等は一定しておゝ
す種々雑爰なるものが発見されている。

才Ⅱ様式 千葉県市川市須和田真向遺跡出土
資料を標式とする真向式土器である。器形は、甕
・坏・高坏等が知られているにすぎない。甕形土
器は、既述様式と同様に二種類あり、一は才Ⅱ様
式の煮沸用が発達したもので口縁部が部厚になり
胴部もより長手なものである。二は口縁部が頸部
で一度直立してより鋭く外反するもので底部小さ
く胴部最大径は器高の上位にあり口縁部径と略同
値を示している。坏形土器は、前様式と比較して
非常に浅くなり口縁部が鋭く外反し平底の底部と
直結するものと、口縁部短く直立し平底に至つて
いるものとの二種類がある。高坏形土器は、坏形
土器に胴部をつけたものであるが、脚が高くした
がって全体的に及て大形になっているものが多い
様であるが、この点については明瞭ではない。

才Ⅲ様式 こので才Ⅱ様式と稱するのは、千
葉県市川市須和田國分所在遺跡出土資料を標式と
する国分式土器を指す。器形は、甕、壺、坏等が

存在するか、一般に小形のものが多い様である。
甕形土器は、口縁部外反し頸部は必持ち直立する
ものが比較的よく見られる。而して肩は張り胴部
最大径は頸部近くに位置する。底は小さな平底で
あつて中には小形の台付のものも存在している。
壺形土器は、口縁部外反し、胴部球形を呈するも
ので最大径は中心におく平底のものが近時知られ
た。坏形土器は逆八状を呈し平底のものがよく
見られ、口縁部がつけられているものもよく見られる。
尚、底部は系切底が支配的である。この様式の土
師器の研究は、まだきわめて不十分であるが、才
Ⅱ様式以前と異なり、へらを使用せず、その整形
にロクロを使用していることに特徴が認められて
いる。

以上、関東地方に於ける土師器を五様式にわけ
て編年的に略述してきたが、まだ充分に一文化事
象を適格に把握する手段としての資料が乏しいとは
云えず、今後これらの編年的研究は一文化階梯ご
とに微に入り細を穿ちつゝ、進展することであらう。
しかし土師器の研究は育一性を認識しうる一ゼツ

トを中心とする文化階梯の解明にあらねばならず、その相互關係の地域的特色に立脚しつゝ、進められなければならぬことは勿論であらう。かゝる要求に依じるかの様に最近進められているのが、各型式の分析的検討と各型式相互間の充填型式との認定の試みであると云えるであらう。

四

前項において瞥見せる五様式は、杉原教授の編年的研究に立脚して述べたわけであるが、この編年を更に進めて各型式相互間のヒアタスを充填する等、より整備せんとする動きが顕現されてきたことも最近に於ける研究の一の傾向であると云える。

さう前期の和泉式より中期の遼高式（才皿様式→才皿様式）へと緩行する様相をみるとき漸緩的ではなく、その間に一型式を介在させることにより、きわめてその推移過程がスムーズに把握されると云う観点より設定されたものに矢倉台式なるものがある。^(註1)この型式は、東京都杉並区矢倉

台遺跡出土資料を標式として萩原弘道氏が提唱されたもので、器形には、壺、壺、碗、甕、高坏が知られている。甕形土器は、和泉式（才皿様式）の球形の胴部を上下に引きのばしたごときもので長胴の遼高式（才皿様式）との中間形態を示している。口縁部はたゞ外反するものと一度頸部で直立してから外反するものがあり、底部は平底である。壺形土器は、和泉式に酷似するものであつて口縁部と胴部とが略同高を示すもの及び頸部が極度にすぼまり胴部が横に広い楕円球形を呈するものとがあり、底部は多くの場合、前者は丸底、後者は小さな平底である。碗形土器は、この形式独自の形態を呈するもので、横に広い楕円球形を横に半截せるごときものと口縁部が広持ち外反し縁をもつもの等がある。而してこの碗形土器の後者は次の遼高式土器の坏形土器に変遷するかの様である。甕形土器は、複合口縁を特徴とし胴部は直線的に下部に向つて若干すぼまることき傾向を有しつゝ、底部近くで急激にすぼまるのが顕著な特徴である。高坏形土器は、碗形土器を更に扁平に

近くしているときもので、胸部は八字型に開いて
いる比較的背高のものである。かゝる矢筈台式と
稱される一群の土器は、提唱者の主張される様に
和泉式と壺高式との中間に介在してしかるべきも
のであろう。しかし問題は、この植土器の分布状
態が現在に於いては局限されているかのごとき感
あるを否定出来ないのである。

壺高式土器（オマ様式）にあつても可成りの向
題がある。その一例を壺形土器にとつてみれば、
口縁部が鋭く外反するものと一度頸部に直立し
てしかる後に外反するもの等があり、又胸部に張
りがあるものと張りがなく直線的にすぼまつてい
くもの等が存在しており、これは恐らく二型式以
上に分類しうる可能性が存するものではあるまい
かと思われる。

真向式土器（オマ様式）は杉原教授によつて設
定されたが、その文化内容が明確さを欠くと云う
見地よりそれに代えて、玉口時雄氏は、東京都新
宿区落合遺跡出土資料を標式として落合式なる型
式名を、萩原弘道氏は、千葉県銚子市松岸遺跡出

土資料を標式として松岸式なる型式^{註4}を各々提唱さ
れているが、オマ三者より見るにそれらの各型式と
稱される一群の土器には、それぞれ性格を異にする
傾向が若干認められる。標式遺跡の所在地域と
なつてゐるその附近に於いては、後期初頭の型式
として位置する妥当性が認められるであらうが、
問題は、それら一群の各型式が同一性を有しない
と云ふ点にあるのではないか。この点については地
域的な性格が顕著にあらわれてきたか、めなの
であるのか、資料の不足であるのか、中期の壺高
式土器文化の分析によつてはじめて明確に把握さ
れるであらう。

回分式土器（オマ様式）は、資料が乏しめて限
定されており將來の新資料の増加に待つべきもの
がある。しかし現資料をもつてしても回分式は恐
らく二乃至三階様に分類するべき可能性を有して
いることを附記しなければならぬのである。

五

最後にかゝる土器量の所産年代について述べな

くてはなるまい。まづⅡ様式土器は、前期古墳である奈良県茶臼山古墳の墳頂等より出土している土器型式と同様なるものであり、Ⅲ様式土器は、中期古墳とされている佐賀県の横田下石塚出土例と同形態を有している。又、本様式土器を出土する竪穴住居址より滑石製の模造品が出土する例があり、加ふる石製模造品は中期古墳にのみ副葬されているものである。Ⅳ様式土器は、その形態に須恵器の影響が顕著に着取され、又、東京都富士見台遺跡より後期古墳に収められるコの字型の勾玉が伴出している。Ⅴ様式土器は、後期古墳中よりも発見されるが奈良法隆寺若草伽藍址等より出土している。^(註5)Ⅵ様式土器は、千葉県長生寺等の奈良前期前後に比定される遺跡をはじめ各地の国分寺址等より発見されており、その所産年代が奈良時代以降にあることを察せしめるのである。

以上、きわめて簡単に南関東地方土師器研究の現状階に於ける成果と若干の向題点について略述して来たが、それを通して痛感されることは、ま

づ資料の不足と云うことであらう。加ふる現状階的課題に應える加のごく青年考古学協議会に土師器家底調査依頼クルーフが結成されたことは、まことに意義あることであつて、各地に在住される諸研究者の協力に期待するところ大なるものがある。

(昭和三十三年二月二日稿)

(註1) 本編年は先学諸氏の業績に立脚して筆者が様式別に羅列分類せるものであり、先学の見解として代表的なものには、杉原莊介、中山淳子両氏『土師器』(日本考古学諸書五)がある。

(註2) 萩原弘黄氏「土師式文化前期に対する一考察」矢倉吉式二器の提唱(西郊文化八)

(註3) 玉口晴雄氏(落合遺跡出土の土師器について)後期土師器に対する一考察(早大考古学研究室報告『落合』所収)

(註4) 萩原氏「銚子市松岸町原史時代遺跡について」(上代文化二三)、同氏外「銚子市松岸遺跡の土師器」(西郊文化一四)

(註5) 杉原、中山両氏『前掲書』